

小児パラプレジアの病因と治療に関する研究

分担研究者 村地俊二(愛知県心身障害者コロニ-中央病院)

本年度の研究計画はまず小児パラプレジア症例の収集と整理ということで、その症例の概況を報告する。全症例74例(男28, 37.8%, 女46, 62.1%)で、両下肢麻痺の原因は、外傷起因7例、腫瘍によるもの8例、二分脊椎によるもの56例、その他3例であった。

外傷性の7例中、転倒・下敷等によるもの4例、交通事故2例、分娩外傷1例で、受傷時年齢は出生時から11歳に及び、うち3歳児が4例であった。

次に腫瘍性の8例中、脊髄腫瘍2例、神経芽細胞腫1例、残りの5例は、いわゆるLipomeningomyloceleといわれるDural Lipomaであった。年齢は生下時より徐々に臨床症状が出現した。

次に症例の大部分を占める二分脊椎またはMyelomeningoceleは56例で、初診時年齢は1~5歳が37例, 66%, 女児が34例, 60.7%でいずれも過半数を占めていた。

その他の原因による3例のうち、ダウン症候群で環軸転位(Atlanto axiale dislocation)による麻痺が2例、心奇形(動脈管開存症)の手術後麻痺が1例であった。

両下肢麻痺のまひレベルは、Th₁₂より上位15例、L₁₋₂8例、L₃₋₄26例、L₅19例、S₁₋₂6例という分布であった。

次に脊柱変形を見るに、明らかに前彎9、後彎8、側彎21、後側彎2の計40例で、全症例中54.1%を占め、半数以上に脊柱変形を認めた。

その他、股関節脱臼、足変形等も多数に認め、大多数が車椅子または歩行車使用であった。これら下肢変形、歩行形態の推移、治療と教育との関係については次回に報告する。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度の研究計画はまず小児パラプレジア症例の収集と整理ということで、その症例の概況を報告する。